

〔ライブラリー〕

コミュニケーションの発達と指導プログラム
—発達に遅れをもつ乳幼児のために—長崎 勤・小野里 美帆
日本文化科学社 1996年

人が発達していく過程で他者とのコミュニケーションがどのような役割を果たすのか、発達心理学がその角度からコミュニケーションを取り上げ始めてから、既にかかなりの時が過ぎたが、それはまだ本当の所よく分かっていないと言ってもいいだろう。コミュニケーションは二者関係を基本とするため、「子ども」を対象とする方法論では収まりきれず、研究方法自体の変容が必要で、様々なアプローチが試みられているものの、決定打はなかなか見つからないという事情がある。さらに発達心理学的関心だけから言っても、コミュニケーションの概念の振幅は大きい。人との関わりのすべてをコミュニケーションと捉えるのか、言語的コミュニケーションおよびその派生概念ともいえる前言語的 and/or 非言語的コミュニケーションの範囲で考えるのか、言語的コミュニケーションを中心に考えるのか等々、立場は様々である。

このようにコミュニケーションをめぐる研究は混沌の中で方向性が模索され、それ故エネルギーも感じられる現状だが、近年の流れは、漸く言語中心にコミュニケーション発達を捉える傾向を脱して、非言語・前言語・言語コミュニケーションを、発達の過程で多層的に捉えるところに落ち着いて来ていると言えるだろう。障害児に関わる研究分野では発達評価、指導法への示唆という実際の必要性からも、その傾向はより顕著になってきている。本書は、そのような流れを的確に発達障害児の臨床の場に取り込み、豊富な臨床経験に立脚して、評価法、指導プログラムの作成にまで結実させた筆者らの仕事をまとめたものであり、時宜を得た好著であるといえる。発達に遅れ、特にコミュニケーションに関わる遅れや問題をもつ子どもをもつ家族、相談や指導にあたる教育や臨床の担当者、またコミュニケーションの発達やその障害に関心を持つ学生、研究者にとって、理論、実践の両面からそれぞれ得るところが多いと思われる。

構成は大きく理論編（コミュニケーション発達の考

え方）と実践編（乳幼児コミュニケーションアセスメント・指導プログラム—CAP）に分かれている。

理論編は、「コミュニケーションからことばへ」、「ことばの発達を促す大人のかかわり」、「コミュニケーションの発達と認知」の3章からなり、本書を作り上げている理論的立場がわかりやすく、手際よくまとめられている。音声言語の理解と表出に関わる部分も含まれているが、本書の真骨頂は前言語的コミュニケーション段階の構造化であり、筆者らはこれを基底的伝達構造と名付け、要求伝達系と相互伝達系にわけて、それぞれに発達の節目と思われるステップを明確化することに成功している。また各ステップでの大人の発達促進的関わりの意味が吟味され、それが指導プログラムの中での大人の関わり方のアドバイスに結びつく伏線となっている。

実践編は、真に実践の役に立つ構成だと言えよう。CAPは「乳幼児のコミュニケーション発達アセスメント(ASC)」と「乳幼児のコミュニケーション指導プログラム(TSC)」の両者からなること、その目的や特長、実施方法などが詳述され、療育や臨床指導の場や家庭でのCAP活用への指針を与えている。実践編に続く形で、本書のほぼ半分の頁がASCおよびTSCの紹介にあてられている。発達アセスメントも指導プログラムも親を対象とする形式を取っているが、教育や臨床の担当者にとってもコミュニケーション発達の見方、それぞれの発達の側面や段階における指導あるいは関わり方の具体例を学ぶために大変有効であると思われる。

筆者らは、障害をもつ子どものコミュニケーション指導の目的に関わって、「明日をみつめて」（未来への一歩前進）と「今、ここで」（現在の充実）の両立の必要性を繰り返し強調している。障害をもつ子どもとその家族にとってそれは難しくも切実な希求であり、両立を目指すべきことに改めて深い共感を覚える。

（筑波大学心身障害学系 斎藤佐和）